



Figure 3.6-1. Accident Potential Zones and Clear Zones at MCAS Futenma

2004年に海兵隊が飛行運用を再開して以降、MV-22は10万飛行時間以上を記録し、ハイチでの人道支援／災害救助活動への援助、リビアでの撃墜された米パイロット救出への参加、イラク及びアフガニスタンでの戦闘活動への支援、MEU展開の複数回の実施を成功させてきた。2004年から2011年にかけては、MV-22は89,215時間飛行し、2008年にクラスAの事故が一件あった。MV-22の事故率の実態を示すため、テスト段階での

MV-22の沖縄配備及び日本での運用に関する環境レビュー
2012年4月

増大した下降気流による個体の喪失や保護された鳥類の巣の喪失は、植物がないとしたら、着陸地点から300フィート以内の位置又は着陸地点から300フィート以内に位置する森林の縁で生じる可能性がある。これらの位置では、植物が下降気流の風速を大きく減少させることはないが、巣作りや繁殖中の個体は、作りたての巣や繁殖地を守るため、MV-22の運用による増大した強風を受けても分散する可能性は低い。もし森林の縁が着陸区域から300フィート以上離れた場所にあるならば、下降気流の速度は約毎時47マイルになり、自然の強風でもこの速度が一般的なため、個体の巣やねぐらに被害を与えとは考えられない。

着陸地点からの距離による減速に加え、着陸地点周辺の密集した植物も防風林の役割を果たし、下降気流の風速を時速47マイル以下まで減少させる。森林の縁から100フィート離れた場所では、植物により風速は最大毎時約16マイルにまで減少するが、これは自然に発生する風速よりもはるかにゆるやかなものである。50フィートの植物は農業地で使用される防風林（背の高い樹木が3×5本並んだ状態）の密度に相当する。したがって、森林の縁から50フィート以上離れた地点の下降気流の風速は、繁殖中の個体や巣に対してほとんど影響を与えないまでに減速する。よって、森林の縁から50フィート以内、あるいは、着陸地点から300フィート以内の何もない区域で繁殖しているかねぐらにいる個体又は巣のみが下降気流の影響を受ける可能性がある（図4.1.7-2）。北部訓練場の9つの着陸帯（着陸帯1、3、4、12、15、17、18、ベースボール及びファイヤーベース・ジョーンズ）において、5つの保護種の鳥類が以前見つかっている。これらの種は、アカヒゲ、ヤンバルクイナ、アマミヤマシギ、ノグチゲラ及びカラスバトである。以下、これらの種の全体的な特徴及び下降気流の影響を最も受けると考えられる区域で巣作りしたりねぐらにいる個体が受ける影響の可能性を説明する。

アカヒゲ

アカヒゲは、南西諸島固有の鳥で、その個体数は一番多い。現在3つの亜種が確認されているが、沖縄県に生息しているのはナミエ及びコマドリのみである。アカヒゲの総個体数は8万から9万と考えられている。沖縄北部ではよく見られているが、他の島では急激に減少していると報告されている（バードライフ・インターナショナル、2011年）。流域調査及びその他の調査では、北部訓練場で散在して430の目撃例があった（海兵隊基地キャンプ・バトラー、2010年）。この種は2011年に着陸帯1、3及びファイヤーベース・ジョーンズで記録されている。

この種は、水辺の常緑広葉樹林の中の湿地帯の密集した下生えに生息する（バ

